

北九州市立大学
文学部紀要

第84号

— 目 次 —

- 「くだものいそぎ」とは何か
物語を動かす類型—観音利生譚の一形態と仮名本『曾我物語』卷三をめぐる—
仮名本『曾我物語』の五郎像と源義経—斬り合う太刀の象徴するもの—
渡瀬 淳子 …………… 1

北九州市立大学文学部

比較文化学科

2015

「くだものいそぎ」とは何か

渡瀬淳子

はじめに

『源氏物語』「東屋」巻の末尾は次のように締めくくられる。
……尼君の方より、くだ物まい^(を)れり。箱の蓋^(ふた)に、紅葉、
葛^(つた)などお^(を)りしきて、ゆへく^(を)しからず取りまぜて、敷^(し)
たる紙^(かみ)に、ふつつかに書きたるもの、隈^(くま)なき月にふと見^(み)
ゆれば、目とゞめ給ふほどに、くだもの急^(いそ)ぎにぞ見^(み)えけ
る。

やどり木は色かはりぬる秋なれど

むかしおぼえてすめる月かな

と古^(ふる)めかしく書きたるを、はづかしくもあはれにもおぼ
されて、

里の名もむかしながらに見^(み)し人の

おもがはりせるねやの月影

わざと返りこととはなくてのたまふ、侍^(つた)徒なむ伝^(つた)へけると
ぞ。

ここで引つかかるのは「くだものいそぎ」という言葉である。
言葉として熟さない感じがするうえに、一般的に、「早く果物

を食べたがっているようす」と解される^{*}その語義も、この
場面にそぐわないように思える。この解釈は正しいのだろうか。

というのも、「くだものいそぎ」というのは管見の限り『源
氏物語』の、この場面のここ他には用いられた形跡のない語
であって、「○○いそぎ」という複合語はいくつかあるが、そ
の場合「いそぎ」の意味はほとんどが「準備・用意」であるか
らだ。池田亀鑑はかつて「いそぎ・けいめい考」（橋本博士還
暦記念会編『国語学論集 橋本博士還暦記念』岩波書店 一九
四四年）で、源氏物語の中に「いそぎ」の用例は三三例あるが、
「くだものいそぎ」を除いてすべて準備・用意の意味で用いら
れていると述べた。「くだものいそぎ」だけが例外だと言える
のはなぜなのだろうか。「くだものいそぎ」の語義をめぐって
考察した。

なお、以下、断りのないかぎり、源氏物語本文は新日本古典
文学大系（岩波書店）を、源氏注は源氏物語古注釈集成（おう
ふう）を用いた。

「くだものいそぎ」の注釈史

源氏の古注を繙いてみても、「くだものいそぎ」の語注はさして多くない。『奥入』『河海抄』『花鳥余情』といった主要な注にはなく、『源氏釈』『紫明抄』『異本紫明抄』などの鎌倉に遡る古注にもなく、『源氏物語提要』などの梗概書にもなく、『細流抄』『紹巴抄』といった室町期に源氏学の中心となった三条西家流の注にも見られない*₂。「くだものいそぎ」は、意味のとれなくなった言葉の中でも、葵巻の「三つが一つ*₃」のように秘事となることもなかった。現代の我々にはなじみがなくなってしまうただで、中世までの人々にとってはわざわざ注釈するまでもない語であったか、あるいは読解上さして重要でない語だったものと思われる*₄。その「くだものいそぎ」に注が付いているのが見られるようになるのは、一五世紀末頃になってからである。最も古い注は明応四年の肖柏跋文をもつ『一葉抄』だろうか。

くだ物いそぎ 双紙地也 哥にめをとめ給へは くだ物に心のうつるやうにみゆると也 され事也

ここに記されているのは、中世後半の源氏学を牽引した連歌師宗祇の説とされる注である*₅。宗祇の注はすでに現在行われている解釈とよく似た読みを示している。薫が紙に書かれた歌に目を留めた様子が「くだ物に心のうつるやう」、果物に興味心が移る、果物に気を取られたように見えた、というのである。他にも現行の注に共通する「くだ物いそぎにぞ見えける」

の一文が、「双紙地」つまり語り手の判断であること、「ざれ事」すなわち冗談めかした語りであることも指摘している。

それより少し前、享徳二（一四五三）年の本奥書をもつ『光源氏一部之歌』（祐倫 島原松平文庫本*₆）には、語釈されているわけではないのだが、「食べたそうに見える」という解釈がすでにあつたことを思わせる一文がある。

くれぬれは月あかうさしいでたり。あま君のかたよりくだ物まいらせたる。すりのふたにしきたるかみに、
物かとなるをふつと云
 ふつつかにかきたるもの、月かけにふとみえたり。
かほる
 めとゝめ給へは、くひ物いそぎにそみえける。

「くひ物」は「くだ物」の誤写かと思われるが、九曜文庫本（早稲田大学図書館蔵 正保四年写）でも「くひ物」となっている*₇ので、元々の文章から「くひ物いそぎ」だったものと思われる。「た」と「ひ」はもとより間違えやすい字だが、これは薫が食べ物に気を取られているという解釈が根底にあつての誤写ではないだろうか。

『一葉抄』の宗祇説は後にも引き継がれた。『林逸抄』（林宗二 永祿二年頃）では

くだ物いそぎ 双紙地也 哥に目をとめ給へは くだ物に心のうつるやうに見ゆるそ也 されこと也

と同じ注を記している。林宗二は清原宣賢、吉田兼右から学んだことが知られているが、肖柏から古今伝授を受けており、宗祇の源氏説に触れる機会も多かったと思われる*₈。

『孟津抄』（天正三年）を著した九条種通は、三条西実隆の外孫であり、祖父の学問の影響を強く受けている。

あま君のかたよりくだ物まいれり 弁のかたより哥あり

此哥をみるとすればくだものいそぎになると也。

「くだものいそぎ」は文字どおり果物に急ぐということだろうか。歌を読もうと顔を近づけると、その姿が果物を急ぐ（急いで食べようとする？）ようになるというのならば、現代と同様の理解である。甘露寺家の人物の手になるとされる穂久邇文庫蔵『覚勝院抄』*₉（室町末期写）も、同じように

史云 尼君よりまいりたるくだものにしきたる紙に哥を書きたるを。はやく御覽ぜうずると思給て取給へはくだものをいそぎ給やうなる。と也

としている。紙にかかれたものを早く見ようとして手に取ると、とあるのは、紙ではなく果物が入っている蓋を手にとったのだろう。書き付けを読もうと急いで蓋を手にとった動作が、果物を食べたくなって急いでいるように見えた、ということだろう。

『孟津抄』や『覚勝院抄』の「いそぎ」は急ぐ、急いでするの意味と思われる。甘露寺家は、宗祇とともに源氏物語の研究に取り組んだ三条西実隆の三条西家とはかなり近い親戚筋にあたる*₁₀。そのため甘露寺家の人物の手になるのであれば、宗祇流や三条西家流の、いわば中世源氏学の王道の説を継承していると思われる。王道の説ということであれば、細川幽斎の自筆かとされる山口県文書館蔵『源氏物語古註』*₁₁（右田毛利家

伝来本 室町末期頃写）なども相当するだろう。

一、はこのふたととハ、くだ物をいれたるはこのふたに、もみぢ、つたなどしきたるかみに、ふつゝかにとハ、もじおほきにかきたるうた、月くまなきにふとみえたるを、めとどめて、かほるみ給へば、くだ物いそぎとは、くだ物をめにかけ給たるにゝたる、と也。

やはり薫の様子が「くだ物にめをかけ給」う（果物に注目していらつしやる）ように見えたとしている。

中世の終わり頃になってもこの解釈の傾向は健在である。『萬水一露』*₁₂（宗碩↓永閑 承応元年松永貞徳跋）

したにかきたる物にとゝめて見給ふをくだ物に心を入たるやうに見えけるとの給ふ也

薫の様子は「くだ物に心を入れたるやう」（果物に心引かれていよう）に見えたという。

『岷江入楚』（中院通勝 慶長三年）がこの部分を

くだ物いそぎにそ見えける されてかけり
と冗談めかした言い方であるとしているからには、はつきり果物に気を取られたとは書かなくても、薫が果物を食べたそうな様子に見えるという理解なのだろう。

後世に長く影響を与えた『湖月抄』（北村季吟 延宝元年）は、次のように注釈している。

くだものいそぎ 【孟】辨のかたより歌あり。此うたを見んとすれば。くだ物を急ぐになると也。【師】双紙地也。

歌にめをとめ給へば。くだ物に心のうつるやうに見ゆる也。

たはぶれごと也。

『湖月抄』は前近代の注釈書の特徴である諸注集成としての性格を持つが、ここでは二つの注が引用されている。一つは先にも引いた『孟津抄』であり、もう一つは師説、すなわち季吟の師、箕形如庵の説である。この部分、箕形如庵の説は宗祇説と同じであり、近世に入っても宗祇説が重要な説として継承されていたことが分かる。『湖月抄』は近世を通して源氏を読むための重要な注釈書であり続け、近代になっても読まれ続けた^{*13}。明治二〇年代に最も早く出版された源氏物語の校注書は『湖月抄』であり^{*14}、近代の文人・研究者たちの大半は河内本でも青表紙本でもなく、『湖月抄』によって源氏を学んでいた。そのため、おそらく中世以来の「くだものいそぎ」説は、この『湖月抄』によってゆるがぬ定説となったと考えられるのである。そしてこの「くだものいそぎ」解釈の源流には宗祇をはじめとする連歌師たちの注釈活動があった。

「いそぎ」の意味の変遷

ここで、一旦「いそぎ」の古代・中世における語義を確認しておきたい。「いそぎ」の語義は大きく分けて二つある。一つは現代語にも通じる「急いで物事をする事」¹⁵。「急いでしなげればならないこと」の意であり、もう一つは「準備・支度」である。さらに先に挙げた池田亀鑑の「いそぎ・けいめい考」に

よれば、

「いそぎ」とは何か事のある時、その事を果たさんがために、専ら心をその目的に集中して、準備し、奔走し、盡力することを意味してゐるらしい。用意、支度、奔走、盡力等と訳して大體誤なからうと思はれる。準備には心が落ちつかず、あれやこれやと氣を配る必要があり、又自ら手を下して急いで事を處理する必要があるから、従つて「いそぎ」には「いそがし」といふ性格が必ず内在する筈である。

それで、「いそぎ」といふ名詞と、「いそがし」といふ形容詞との間には、必然的に意味の上に於て、密接な關係が認められることになる。ただ、「いそぎ」は、「いそがし」といふ状態ではなく、さういふ状態を性格としてもつてゐる仕事そのものをさすのである。かくて、「いそぎ」はいそがしく行ふ仕事、催しを意味し、とりこみ、繁忙等の意に解すべき場合が多い。(傍線は引用者による)

とあり、準備や支度にまつわる気ぜわしき、「とりこみ」の意が含まれているという。

「準備・支度」の意味は平安時代の和文で多く用いられた。動詞の「いそぐ」にも同様に二つの意味があり、『更級日記』に「下るべきことどもいそぐに」(任地に下るための色々な準備をしている)とあるように、平安時代の和文では準備する・支度するの意味で用いられることもよくあった。

これが中世にはいると現代語に近い意味が優勢となったよう

だ。『時代別国語辞典』の室町時代編を参照すると、「準備すべきこと、またその準備」の意味で用いられる中古以来の「いそぎ」の例は、『宗長手記』に「明日一折りのもよほし、京ちかきいそぎにことつけて、発句ばかり送し也」とある一例のみで、他は「すぐ短時間のうちに処置する必要のあること」の意味の用例が目立つ。引用元も『中華若木抄』など禅林の抄物が多くなる。「〇〇いそぎ」と複合語になる場合も、後生の準備や死に支度、旅立ちの準備を意味する「いでたちいそぎ」のように、以前は「支度・準備」の意味が中心だったものが変化し始める。例えば、中古から近世まで使用された「こころいそぎ」という語があるが、中古の『落窪物語』には、落窪の姫君のもとに道頼を迎えた二日目の明け方、道頼に出すための朝食の支度に奔走するあこぎに向かつて台所番の女が「あないとほし、心いそぎをかふし給ふがいとほしさ」という。ここではお客のもてなしのことを言っているわけだが、「心いそぎ」に「心の中で計画し準備すること、段取りを決めて支度すること」の意があるからだろう。それが近世になると「名月の心いそぎに むつかしと月を見る日は火もたかし」（『曠野』 元禄二（一六八九）年）、茶の湯の伝書『南方録』（元禄頃か）に「巧者の客ほど火相に心を用て心いそぎするゆへ、炭加へ候へば、客落付て心閑なるもの也」など、「物事を早くすすめようとすること、気がせくこと」という「急ぐ」に近い意味で使われる例が増える。『毛吹草』に見える「船頭のそらいそぎ」という言葉も「急

いでいるふりをする」の意だ。日葡辞書でも「いそぎ」は「Isogu. 急ぐこと」となっているので、中世の終わりから近世にかけて、「いそぎ」は現代語とほぼ同じ意味で用いられることが一般化し、中古から言葉の用いられ方が変わっていたことがわかる。

思うに、物語を中心とした和文で用いられる「いそぎ」の第一義は、長く「準備・支度」だったが、中世の一五世紀頃を境に「急ぐこと」へと変化したのではないだろうか。そのため、「いそぎ」の根底にあった「その事を果たさんがために、専ら心その目的に集中」するという意味が表へ出るようになったものと思われる。中世の注釈に頻出する「くだ物に心を入れたる」や「くだ物に心のうつる」という語釈は意識を集中させる意味を拾い上げたものだからである。

こうした変遷を踏まえ、現代では「くだものいそぎ」は文字通りの「果物に急ぐこと」、すなわち、果物を早く食べたがるという意味で受け取られるようになったのではないか。一五世紀末から源氏注で「くだものいそぎ」に言及されるようになるのは、その頃からこの言葉の意味が分からなくなっていたことを示しているように。

近代の解釈

近代の『源氏物語』研究のなかでも、「くだものいそぎ」はとくに注目される語ではなかった。校注を施された源氏物語と

しては、いち早く出版された博文館の日本文学全書（一八九一年刊）では「くだものいそぎ」に語注をつけていない。大正七年の校註日本文学叢書（物集高見監修・物集高量校註、広文庫刊行会）では「菓物急ぎにぞ見えける 歌に目を留め玉へば、菓物に心の移る如く見ゆると戯れて云へる也。」となっており、大正一五年の有朋堂文庫では「目とゞめ給ふほどに、菓物いそぎにぞ見えける。」の注に「書きたるものをよく見んとすれば、自ら余所目には菓物に気を取られて居る様に見ゆると也」と注釈されていて、『湖月抄』と云わんとするところは同じである。戦後の窪田空穂による現代語訳^{*15}でも

：尼君の方から菓物を参らせた。箱の蓋に、紅葉や葛などを折って敷いて、面白く取り混ぜて、敷いてある紙に、無器用を書いてある物が、隈もない月の光でふと見えるので、君の目を留めて御覧になつてゐるのは、菓物に心を取られてゐるやうに見えることであつた。（『現代語訳 源氏物語』八卷 改造社 一九四九年）

となつている。こうした、「いそぎ」の意味を中世源氏注以来の「菓物に心を入れる（心引かれる、気を取られる）」としている『湖月抄』踏襲型の注に対して、近代の作家たちの訳はほとんどが「急ぐこと」の意味で解釈している。このような動きもやはり研究者たちの中からいち早く始まったように思う。大正一三（一九二四）年刊の全訳王朝文学叢書『源氏物語』宇治十帖下の吉澤義則注は「歌に目をつけるのは、一寸菓物を見つ

めてほしさうにしてゐるやうに見えた。」とあり、校註日本文学大系『源氏物語』下巻（国民図書株式会社 一九二七年）沼波守の注釈では「○菓物いそぎ 菓物をほしがる」、金子元臣は『定本源氏物語新解』（下）（明治書院 一九三〇年）の頭注で、「目とゞめ給ふほど……薫が目をとめて見ていらつしやるので、丁度菓物に早く手を出したがつてゐるやうな恰好に見えた。」としている。表現は時代を追うごとに直截的になっていくように、同じ吉澤義則の訳でも昭和一二（一九三七）年から一四（一九三九）年にかけて刊行された『對校源氏物語新釋』（平凡社）では「菓子急ぎ 薫の様子が菓物に早く手を出したがつてゐるやうに見えた」となっており、大正一三年の「ほしさうにしてゐる」から「早く手を出したがつてゐる」に変化している。これは金子の注と同じ文言であり、『新解』の影響を受けたものかとも思われる。

こうしてみると、訳注の傾向が浮かび上がつてこないだろうか。同じニュアンスを言いあらわそうとした時に、大正頃までのやんわりとぼかした表現から、昭和に入つてより直截的になつたように思うのである。

戦前から現代語訳の始まつた与謝野晶子訳と、谷崎潤一郎訳も、こうした学者たちによる解釈の影響を受けている。

：尼君の方から菓子などが運ばれてきた。箱の蓋へ楓や葛の紅葉を敷いて雅やかに菓子の盛られてある下の紙に、書いてある字が明るい月光で目についたのを、よく読もうと

顔を寄せているのが、食欲が急に起こったように他からは見えておかしかった。(与謝野晶子)

…折柄尼君のところからお菓子をお届け申し上げる。筥の蓋に、紅葉や蔦などを折り敷いて、趣深く取り合せた上に紙が敷いてあるのに、何やら不細工に書いてあるのが、隈ない月かげにふつと見えたので、それにおん眼をお留めになるのであつたが、何だかお菓子が召し上がりたくて急いでいらつしやるやうに見える。(谷崎潤一郎)

与謝野晶子の訳^{*16}は昭和三三年河出書房新社刊の国民文学全集によつたが、仮名遣い以外は昭和一四年完成の訳と同じである。この東屋を含む巻の谷崎訳が出版されたのは太平洋戦争直前の昭和一五年、時節柄、出版差し止めにならぬよう危険な話題を避け、原典に忠実に訳出するため学者の校閲を受けた本文は、戦後、谷崎の納得のいくように幾度か改編されたが、この「くだものいそぎ」の部分はいずれのバージョンでも変更されていない。与謝野・谷崎両者とも、「いそぎ」の意味を疑うこともなく文字通り薫が果物に「急ぐ」様子を描写しているが、「気を取られた」という表現ではなく、より直截的に果物への関心(すなわち食欲)を示す表現になっている。

こうした近代の作家たちによる源氏物語の現代語訳は、アーサー・ウェイリーの英訳源氏物語の影響を受けてはじまった。いち早く英訳を手に入れた正宗白鳥によるウェイリー訳の大絶賛が、文壇に源氏物語の大ブームを起したのである。そのウェ

イリーも、金子元臣や吉澤義則らの解釈の影響を受けている^{*17}。該当部分のウェイリー訳は以下のとおりである。(引用はロンドンで刊行された初版本に拠った。)

A box of fruit now arrived from Ben no Kimi. On the lid were laid some sprays of maple-leaf and creeper and deftly hidden among them was a strip of paper with a message of some kind roughly scribbled upon it. The full moon was shining straight on to the box, and Kaoru noticed Ben's note at once. He was feeling very hungry, and while spreading out the paper with one hand, he stretched with the other towards the contents of the box.

(果物の箱がひとつ、弁の君から届いた。蓋の上に楓の枝や蔦が置かれ、乱暴な走り書きのメッセージが書かれた細長い紙片を器用に隠していた。満月はまっすぐに箱を照らしていて、薫はすぐに弁の書き付けに気づいた。彼はとても空腹だったので、片手で紙を広げている間に、もう片方の手を箱の中のものに伸ばした。)

ウェイリー訳では、薫は空腹で、弁の尼の書き付けを読もうと紙を片手で広げながら、もう片方の手で箱の中の果物を取ろうとしている。原文とはまったく異なった描写となっているが、「果物を早く食べたがる」様子を具体的な行動として、その理由(空腹)をも含めて説明的に描いて見せたもののようにみえ

る。ウェイリーが参照した博文館の校註国文叢書^{*18}では「くだ物いそぎにぞ見えける 作者の説明句也、歌に目とぞめむとすればくだ物に心うつるやうに見ゆると也。」となっていて、ほぼ『湖月抄』と同じである。これのみを参照したのでは、薫が空腹だったという解釈にはなるまい。ウェイリーは、『湖月抄』のみを参考にして、源氏物語を英訳したものと伝説のように言われてきたが、そうではない。特にこの部分は、おそらく先に挙げた金子元臣の注を参照したものでろう^{*19}。金子の「早く手を出したがつてゐる恰好」を実際に果物に手を伸ばす仕草として訳出したのではないか。与謝野晶子の訳も「食欲が急に起こったように」とするなど、かなり踏み込んだ訳だが、ウェイリー訳はそこに具体的な動作が伴っている。ウェイリーの訳文そのものが、作家たちの現代語訳に直接影響を与えたかどうかは不明だが、金子の注はこうした戦前の訳出活動に大きな影響を与えていたと思われる。

この後も現代語訳は様々な人の手によってなされるが、これより後の訳は、日本古典全書（朝日新聞社 一九五五年）が「水菓子を早く欲しがつてゐるやうに見えた。『くだものいそぎ』は當時の成語か。」、旧大系（岩波書店 一九六三年）「いかにも、薫が果物を食べる事を急いでいる風に見られるのであったつげ。『くだもの急ぎ』は戯れに言ったのである。」のように「早く食べたがつている」「早く欲しがると訳す方向が主流になった^{*20}。与謝野・谷崎と並んで源氏の現代語訳で名の挙がる円

地文字も「……それがまるで、果物を召し上がりたがつておいでのように見えるのだった。」（新潮社 一九七三年）と訳している。最近でも様々な作家が源氏物語の現代語訳を行っているが、「くだものいそぎ」についてはおおむね「果物を食べたがつている／欲しがつている様子」と訳しており、新しい解釈はないようだ^{*21}。

果物に気を取られた様子なのか、果物を早く食べたがつているのか、「くだものいそぎ」の解釈は中世以来同じラインを継承しながら、戦前の現代語訳を一つの境目として、「いそぎ」の意味の取り方に小さな変化、より直截的な表現へと転じる変化が起こつていることが分かった。

「くだものいそぎ」とは何か

「くだものいそぎ」の解釈史を概観してきたが、現代につながる解釈は室町時代からの注釈を踏まえた、かなり伝統的なものであることが分かった。近現代の解釈も中世以来の解釈の上であり、「果物に気を取られた様子」なのか「果物を欲しがつている／食べたそうな様子」なのかのいずれかが行われる傾向だった。しかし、平安時代に物語などの和文における「いそぎ」は、多くが「準備・支度」であったのだから、その言葉の意味のままに解釈することは不可能なのだろうか。つまり「くだものいそぎ」を「果物の準備」とそのままに受け取る解釈である。おそらく、そこで問題になるのは「見えける」に敬語がつい

ていないことであろう。敬語がないから「見えた」のは語り手（あるいは浮舟や侍従などのその場にいた女性たち）であると解釈される。語り手の動作であるとすれば語り手は何を見たのか。そこに「くだものいそぎに」——果物の準備に、とある。

弁の尼は、果物の下に敷いた紙に和歌を書き付けていた。明るい月光の下でその文字がふと薫の目に入る。語り手の視線はここで薫の視線と重なる。そして、薫がその文字を読もうと目を留めると、果物の準備に見えた、というのである。薫の姿が果物を用意しているように見えた、というのではなく、これは紙に書かれたものの内容についてではないだろうか。薫の（そして語り手の）目には、紅葉や葛などが敷かれた隙間から、紙に書かれた文字が部分的にちらちらと見えていたのだろう。弁の尼の歌が「宿り木は色変はりぬる秋なれど昔おぼえて澄める月かな」だから、その一部、おそらく「いろかはりぬるあき」あたりが見えたのではないか。果物に添えられた書き付けだったので、薫はそれを「くだものいそぎ」、すなわち果物を整えた挨拶文のようなものかなにか（果物の色づく秋になりました、といったような）、そうした通り一遍の書き物と思ったのではないだろうか。差し入れや贈り物に手紙を添える例は物語に頻出するが、同じ源氏の「早蕨」の冒頭部をみてみたい。

阿闍梨のもとより、年あらたまりては、何事かおはしますらむ、御いのりは、たゆみなく仕うまつり侍り、今は一ところの御事をなむ、やすからず念じ聞こえさする、など聞

こえて、わらびつくぐし、をかしき籠に入れて、これは童への供養じて侍る初穂なり、とて奉れり。手はいとあしうて、わざとがましく引き放ちてぞ書きたる。君にとてあまたの春をつみしかば常をわすれぬ初蕨なり、お前よみ申さしめ給へ、とあり。

大君亡きあと、中の君への元へ届けられた阿闍梨からの贈り物には手紙が添えられており、そこには阿闍梨が故宇治の八の宮の供養のために蕨や土筆を摘んだことが書かれ、歌が添えられている。阿闍梨の手紙は、阿闍梨から中の君への心遣いであると同時に、贈り物が何のためのものか、誰に宛てたものかを明示する役割を果たしている。また、阿闍梨の和歌はわざわざ「引き放ちて」書いてあり、ふつう、和歌は手紙の本文にそのまま続けて書くものであったことが分かる。こうしたことを踏まえると、薫が果物の下に書かれたものを見たときに、贈り物に添えられる口上文のようなものと判断することも十分あり得ると思われる。書かれているものが和歌なのかどうかは、読んでみるまでわからなかったのだろう。そして、「見えける」に敬語が付いていないのは語り手と薫の視線が同化しているため²²であろう。口上のようなものだろうと思つて見たら、それが和歌で、大君のことを詠んだものだったのである。「恥かしくもあはれにも」という薫の気持ちは、この弁の尼の和歌に対する小さな驚きと、それによって大君のことを思い起こさせられた上、顔かたちのよく似た浮舟に心を移した事実を突きつ

けられたことによつて、引き起こされたのである。

このような読みはごく少数ではあるが、まれに見られる。古くは細川幽齋の『源氏物語聞書』*23（続群書類従刊行会 二〇〇六年）に、

くた物いそぎにそみえける 是ヲ用意ヲカケリ

とあるものがそうだろう。言葉が少なくて意味が取りにくいのが、「これ（果物）を準備したことを（紙に）書いてある」ということだと思われる。また、近代でも増田于信『新編紫史*24』

（誠之堂 一九〇四年）が

辨ノ尼の方より菓子進れり。匣の蓋に。紅葉薦など折り敷きて。由緒なからず取交せて。その下に敷きたる紙に。拙に書きたる歌。限なき月にふと見ゆれば。大将は目留め給ふ間に。これは辨ノ尼の菓子急ぎに。心も留めず遽に書き付けたるものとぞ見えける。

と訳している。薫の宇治行きは、浮舟との仲介を頼まれた弁の尼にとつて、予想外の出来事だった。あらかじめ宇治に客人を迎える用意をしていたわけではない。弁の尼はとりあえず薫たちのため、先述の池田亀鑑の指摘のように「あれやこれやと気を配」って食物を用意したにちがいない。薫の目に入ってきたものは、弁の尼が果物を整え、「心も留めず遽に」紙にしたためたものと見えた。つまり、薫は果物に添えられた挨拶文のようなものと一瞬思ったが…という解釈なのであろう。

「くだものいそぎ」は玉上琢弥『源氏物語評釈』（角川書店

一九六八年）では、

字を読み解こうとして、のぞきこむ薫を、「くだものいそぎにぞ見えける」とひやかす。上つ方は、どんなときでも、食欲を示してはいけならしい。

そして、これで、この場の暗さを一瞬すくったのだが。

と、この暗い場面を救うユーモアとして解されており、現行の訳注も多かれ少なかれ、類似の受け取りかたをしていると思われる。語り手のユーモアという解釈が「ざれてかけり」より続く伝統的な解釈であることは確認した。しかし、この場面で、薫は浮舟の容貌が亡き大君に似ていれば似ているほど、その違いを感じて喪失感を深めている。浮舟に夢中なようであり、思わず口について出る詩は男の寵愛が薄れたことを嘆く女の詩である。ここにユーモアを差し挟む必要があるのだろうか。また、この一文を薫の人物像や、果物を食べたがっている様子に見た浮舟付きの女房の文化的程度の低さに結びつけて読解することは妥当なのだろうか。

おわりに

かつて和文脈では「準備・支度」の意味で主に用いられていた「いそぎ」が、室町期あたりにはその意味が次第に失われ、「急ぐ」意味で用いられることが主流となっていくにつれて、「くだものいそぎ」は「果物のいそぎ＝果物の準備」ではなく、果物に「急ぐ」行為と読まれるようになったものと考えられる。

亡き大君によく似た浮舟の前に、大君が永遠に失われたことを再確認して喪失感を深めていく薫が、「果物に急ぐ」ように見えたという描写は、そのあとに交わす和歌のトーンとの釣り合いをみても、この場面のなかで浮いた感じを与える。この一言はそのため、敬語がないこともあり、そのちぐはぐな印象は語り手の「戯れ言」と受け取られるようになったのではないだろうか。現代に至ってもこの解釈が引き継がれたのは、「見えける」を語り手の行為であると敬語法から機械的に判断したこと、「果物の準備」と解釈したとしても、それが薫の行動であるとすればやはり意味が通らないからであろう。いずれにせよ、「くだものいそぎ」は言葉足らずな表現だったため、次第に意味がとれなくなっていったものと考えられる。

中世以来、語り手のユーモアとされる「くだものいそぎ」には、別の解釈の余地が残されており、「伝統的な」読みを再検討する必要があることを指摘して結びとしたい。

*1 新潮日本古典集成（新潮社）では「まるで、くだものを早く欲しがっているように見えた。たわむれに取りなした草子地」とあり、新日本古典文学大系（岩波書店）では「くだ物を早くほしがっているように見えた。語り手のたわむれの言」、新編日本古典文学全集（小学館）でも、「くだものを早くほしがっている様子に。語り手の戯れの言辞。」とあるように、現行の

主な注釈書ではどの注もほぼ同様の解釈を示す。

*2 宇治十帖にも注釈しているものを中心に調査したが、管見に入る限り、以下のような結果であった。語彙辞典でもある源語秘決・仙源抄などで「くだものいそぎ」が取り上げられているものは、まず見られなかった。梗概書の類は、東屋巻末尾の和歌の贈答を省略する傾向が見られた。その他参照した主要な源氏注では、源中最秘抄・明星抄・弄花抄・休閒抄・浮木・花屋抄などにも「くだものいそぎ」の項目はなかった。

*3 紫上との新枕の後、光源氏が三日夜餅の用意を惟光に命じる場面で、「さて、ねの子は、いくつか仕うまつらすべう侍らむ」と問う惟光に対し、源氏が「三つが一つにてもあらむかし」と答える。「今日用意された亥の子餅の三分の一ほどでよい」ぐらいの意味だが、源氏注の中では三日夜餅の故実をめぐって秘事化した。

*4 注2で述べたように、梗概書などのダイジェスト版では「くだものいそぎ」のくだりは紹介されないことが多い。近世に入ってもその傾向は同じ。『十帖源氏』巻九では、「尼君のたよりくだ物参れり。はこのふたに紅葉つたなどおりきたる。ふつゝかにかきたるもの月にみゆ。弁」とあって、このまま和歌に移っている。北村湖春の『源氏物語忍草』（一六八八成立、天保刊）では「くだものいそぎ」のくだりを省いている。

*5 『一葉抄』は、細川家家人であった藤原正存が長享三（一四八九）年に行われた宗祇の講釈を受けて作成した聞書と、別

に入手した肖柏の講釈聞書が主な内容とされている。宗祇と親交の深かった三条西実隆の自筆本も存在することから、宗祇の説であるという信憑性は高いものの、ここに記された宗祇説が本当に宗祇の説かどうかは一考の余地あり。

*6 調査は国文学研究資料館のマイクロフィルムによった。

*7 調査は早稲田大学図書館のホームページ、古典籍データベースによった。なお、九曜文庫本には島原松平文庫本のような細字注の書入はみられなかった。該当部分は以下のとおり「その夜あま君のかたよりくた物まいらする硯のふたに敷たるかみにふつゝかに書たる物月かけにふと見ゆるをとゝめ給へはくひ物いそぎにそ見えける」

*8 肖柏は宗祇から古今伝授を受け、また、源氏物語を学んでいるため、学問上のつながりも深い。なお、林逸抄の林宗二は連歌師ではなく京都の町衆（商売は鰻頭屋）で、学問にも熱心だった人物。後に奈良に移り住み、肖柏から受けた古今伝授を奈良に伝えた。

*9 調査は野村精一・上野英子編『源氏物語聞書 覚勝院抄』九卷（汲古書院 一九九一年）によった。

*10 三条西実隆の母が甘露寺家の出身であり、父を早くに亡くした実隆は母方の叔父甘露寺親長の後見を受けた。また、実隆の息公条は、甘露寺元長女を妻としており、親子二代にわたり深いつながりがあった。

*11 調査は熊本守雄の翻刻（新典社研究叢書一七六 二〇〇六

年）によった。

*12 天文一四年頃に稿本成立か。河海抄・花鳥余情・細流抄・弄花抄の四書を源氏物語の理解に必須の注釈書と位置づけ、四書の内容を欠かすことなくまとめたとする。しかし、先にみたように上記の四書には「くだものいそぎ」の注はないため、この部分は連歌師の源氏学説と思われる。

*13 本稿で取り上げた吉澤義則の『対校源氏物語新釈』は『湖月抄』を底本に河内本で校訂を加えたものである。また、日本古典文学全集（小学館 一九七五年）の「くだものいそぎ」の注は「歌にめをとめ給へば、くだ物に心のうつるやうに見ゆる也。たはぶれごとなり」（湖月抄 師説）となっているなど、つい最近まで現役の参考書だったことがわかる。

*14 国文学研究資料館の「源氏物語・電子資料館 (<http://www.w.nijl.ac.jp/~t.ito/index.html>)」内「源氏物語刊行書籍一覧 (http://www.nijl.ac.jp/~t.ito/HTML/R2_4_gbook/R2_4_gbook_meitai.html)」によった。

*15 窪田空穂による現代語訳には昭和一三年に非凡閣から刊行された現代語訳国文学叢書の源氏物語があり、該当部分の訳は「…薰大将は目をとどめて見て居られるのが、傍からは菓物をはやく召し上がりたいた御様子に見えた。」となっているが、この叢書の訳は上中下の三巻のうち中巻のみを与謝野晶子が担当している上、宇治十帖を収めた下巻の後記に「本編は、訳者の健康と、定期刊行との為、大部分を懇意なる若き学徒の助力を

もとめるといふ成行きとなつた。」とあつて、空穂の仕事ではない可能性が高いため、戦後の訳を紹介した。

*16 与謝野晶子の訳には明治四五（一九一〇）年の抄訳があるが、「くだものいそぎ」のくだりは省略されているため、対象から外した。

*17 平川祐弘『アーサー・ウェイリー 『源氏物語』の翻訳者』（白水社）によれば、「ウェイリー本人は明言しなかったが、そのほかにも大正十四年八月初版、昭和二年九月再版の京都市上京区下長者町の文献書院内王朝文学叢書刊行会が出した全訳王朝文学叢書の第八巻、第九巻（『源氏物語』の五、六巻、すなわち宇治十帖の上下）の吉澤義則の現代語訳も参照している。」とのこと。金子元臣については後述。

*18 翻訳の二巻目 *The Sacred Tree*（賢木）の *Note on the text* に、博文館から一九一四年に出版された本に拠ったと書いている。

*19 平川祐弘前掲書によると、「宇治十帖を訳すに際しては金子元臣新解の明治書院本にも依拠した。そのことはウェイリー自身が初版第六分冊に書いている。」とある。（念のため第六分冊の *Introduction* を見たところ、*In translating Vols. V and VI I have had the advantage of using Dr.Kaneko's edition* とあつた。）

*20 近年でも、佐伯梅友『源氏物語購読』（武蔵野書院 一九九二年、『国文学 解釈と鑑賞』に昭和二八年五月から四六年

三月まで連載したもの）「いかにもくだものに目をとめているように見えたのであつた」のような訳がないわけではない。

*21 近年の作家の訳を試みにいくつか挙げてみる。瀬戸内寂聴「まるで紙の上に載っている菓子を早く欲しがっていらつしやるように見えまして」、尾崎左永子訳は「月光のさすなかで、薫と弁の尼の間に歌がやりとりされて、やがてその夜もふけていきました。」（小学館 一九九七年）となつており、「くだものいそぎ」のくだりをカット、林望「薫がいかにも果物を急いで食べたがっているように見えた。」（祥伝社 二〇一三年）、大塚ひかり「果物を早く食べたがっているように見えるのでした。」（ちくま学芸文庫 二〇〇九年）など、ほぼ同様。大塚はこの描写を「…食を卑しむ貴族の美意識と共に、浮舟という果実を、がっついて早食いしてしまった、その日のうちに抱いて宇治へ来てしまった、薫のいつにない性急さを揶揄しているのでは？」と私は思います。」とする。穿ちすぎか。

*22 こうした例は、三谷邦明「〈語り〉と〈言説〉——〈垣間見〉の文学史あるいは混沌を増殖する言説分析の可能性——」（『源氏物語の言説』翰林書房 二〇〇二年）に詳しい。

*23 永青文庫蔵幽斎筆源氏物語（戊十）（現分類番号は赤二一六・三）の細字書人をまとめたもの。野口元大・徳岡涼の編集で細川幽斎選集1に収録されている。

*24 増田于信の『新編紫史』は、近代のいち早い『源氏物語』全編の訳である。全部で三回出版され、最初のは明治二二

(一八八八)年に出版されたが胡蝶までで中断、明治三七(一九〇四)年版で全訳が出版された。後に戦争直前の昭和一四年(一九三九年)に東学社から再版されたが、これは明治三七年に一〇巻セットで出版されたものを活字から組み直して五巻にまとめたものである。与謝野晶子の現代語訳が刊行中の年でもあり、『源氏物語』の現代語訳需要を見込んでの出版だったと考えられている(文語訳だが)。明治三七年版と昭和一四年版では、句読点や仮名遣いの違いはあるが、本文そのものに大きな変更はないようだ。著者没後の刊行であり、誰かが本文に手を入れるということもなかったものと思われる。著者の増田于信は本居豊穎の婿養子だったが、妻と死別した後、本居家を出て、後に増田家の養子に入った。ちなみに『新編紫史』では、本居豊穎が校閲者として名を連ねている。参考文献・斎藤達哉「増田于信と『新編紫史』——編纂の背景と言語生活史的位位置づけ」『國學院雑誌』一〇七巻六号 二〇〇六年六月

JOURNAL
OF
THE FACULTY OF HUMANITIES
THE UNIVERSITY OF KITAKYUSHU
No. 84 March 2015

CONTENTS

A study of the word “Kudamono-Isogi” used in the Tale of Genji.

A study of the stereotyped tale based on Avalokitesvara Sutra.

A study of the similarities SOGA-no-Goro and MINAMOTO-no-Yoshitsune.

Junko WATASE 1

The Department of Comparative Culture
The Faculty of Humanities
The University of Kitakyushu
2015